

マイペースハート



石志波 音

もくじ

- ♥ マイペースハート
- ♥ 凍る足にひまわりが
- ♥ 愛を囁む
- ♥ お前とデートならすっぴんでいい
- ♥ カノンと五分
- ♥ 新月

p63 p55 p49 p45 p25 p3

マイペースハート

死は作業である。僕は目の前の人がスイッチを押すのを、待っていた。

五十歳女性、河田さん。部屋の真ん中で、黄色のビーズクッションの上で、茶色のトイブードルを抱いている。

真っ白な壁に映し出されているのは、河田さんが暮らすマンションの部屋。ベランダはガーデニングされていて、健康的な緑たちがレースカーテン越しに見える。室内の観賞植物も、大事に育てていたんだろう。

その映像に、パイプ椅子は似合わない。白衣を着た僕も。

ここはピリオドルーム。"マイペースハート" を付けた患者の、唯一の死に場所。

プロジェクトジョンマッピングも僕が扉のそばにいる理由も、今回の患者、河田さんの希望である。

「ララが死んだら、その時が私の死に時だと決めていたの」

話しながら、愛おしそうにララと呼ばれた動かない犬を撫でる。

もう二時間も、河田さんはそうしている。ずっと撫でているから、ララが生きているように思えてきた。冷たいはずなのに。

話し相手として居てくれればいいと言うので居るが、怖気おしげづいたのなら言ってほしい。そういう人は少くないし、上限の三時間まで頑張らなくていい。

「話し疲れたわ。もう寝るね」

河田さんが、手の平に収まる赤いハート型のスイッチを押した。指紋が認証された瞬間、マイペースハートによって強制的に心臓は止まる。顔のシワがピクリともしなくなり、河田さんは眠った。永遠に。

同時に河田さんの部屋も消え、白々しい光に照明が変わる。そこへ飛び込んできた看護師が持ってきたのは、手術台と道具。

僕はララを引き離し、河田さんをベッドへ移す。そして彼女の胸にメスを入れる。

遺体のマイペースハートを取り出す、僕の仕事。ペースメーカーと似た見た目のこれを取り出せば、診察室へ行く。

僕が去ったピリオドルームには何人もの大人が入りし、何事もなかったかのような処理され、また真っ白な部屋に戻る。河田さんの遺言は、部屋で心臓発作を起こしたことにして、葬式も遺品整理も簡単に済ませる、だったか。それを実行する部署に、詳しくは任されている。

ほらね、死は作業だ。医者になった二十四から三年、繰り返していれば慣れる。

マイペースハート。世間には短命装置と呼ばれ、良く思われていない。

二〇七二年の今年、平均寿命が男女ともに九十を超えた。人生百年は当然になった。人体に機械を埋め込めれば、簡単に半永久的な健康が手に入る。肌のハリがなくなっても臓器が老化しても、機械の力を借りれば生きられる。そうしていつの日か、長寿を謳^{うた}うようになった。

しかし、百パーセント人体のままでもいい、無理に長く生きたくない、という人もいる。そのためのマイペースハート。自殺と言われるが、自分の最期を決める選択肢があるといいと、僕は思う。

それにマイペースハートを発動させるスイッチは、常に病院で嚴重に保管されている。あらかじめ予約をしなければならぬうえ、ピリオドルームでしか死ねない。

思い立ってすぐに死ぬわけでも、決めた期日に必ず死ななければならぬものでもない。ただ、やる気になればいつでも死ねる、のだ。

でも、ここに来る時点で、大抵が心のどこかで死んでもいいと思っっている。

ということとは彼女も。例外ではないのか。

診察室の椅子に腰をかけるなり、看護師が扉を開け患者を招く。どうぞと。

さすがに緊張する。僕の仕事場で、君という患者に会うとは思わなかったから。

入ってきたのは、今朝いつてらっしゃいと僕を玄関で送ってくれた恋人。同じ声でお願
いしますと言ひ、すぐそばの椅子に座る。変装がバレないか、ヒヤヒヤする距離だ。

「お願ひします。山口千世さん」

朝ぶりに顔を合わせる。千世は、長生きしたいんじゃないの。

いつもより速く鳴る心臓の鼓動に釣られたのか、千世の診察はあっけなさを感じた。

仕事の立場上、できることは事務的な説明と必要な質問のみ。患者から話さない限り、
プライベートなことは聞けない。

はああと息を吐き、体を椅子の背に預けた。今日の業務は終わったが、すぐに千世が
いる家へ帰る気になれない。おもむろに千世のカルテを開き、パソコン画面を睨む。

山口千世、三十三歳。ここやマイペースハートにたどりついたのは、今日亡くなった河

田さんからの紹介。河田さんは同僚、同じ病院の同じ科に勤める先輩看護師だったのか。そしてマイペースハートを付けたい動機は、「いつでも死ねると逆算することで、人生を豊かにしたい」と。

千世ははにかんだ。茶髪ショートボブに隠れていたイヤリングが揺れて顔を出す。去年の記念日にあげたパール。

マイペースハートをいつ付けたいかと尋ねれば、なるべく早くと答えた。なので一週間半後になった。

手術費も用意してあるらしい。中古の軽自動車を買うような額、いつからどうやって。書類には無感情な情報だけが並んでいる。まるで淡々と話した千世を表しているようで、知りたい気持ちが続めない、見えない。

そこへ突然、背中にのしかかった重み。千世より聞きなれた声。「ふくみのっ！」
大学から七年の親友、同期の医者、西見珠雨しゅううである。この疲れを癒すかわいいうる美少女ではなく、恐ろしいくらい顔が良い男だ。「抱きつかないでくれ、重い」

苦情を漏らすと、しぶしぶといった様子で腕をほどく。

「あれ？ 職場では文野じゃなくて源氏名で呼べって怒んねえの？ はすセンセ♡」

あつほんとかだ。いつもなら鋭くツツコンでいた。表向きは医療機器メーカーだが、自分たちは政府に認められていない闇部署。そのための源氏名と変装は、常に気をつけているのに。

だからコイツは西見じゃない。ここでは、「糸杉い」

ニタニタ気持ち悪い笑い方をしていくせに、整形いらすの顔面がカバーする。

「いな、蓮先生。診察担当で。かわいい女の子とか超絶美人とかとお話ししてんだろ？」

俺ほぼマイペースハート取り付けのオペだからさ、寝顔ばっか」

天然の整った顔立ちが免罪符めんざいふになってきたせいで、性格は難なんだらけ。医者になった訳も、顔と運動能力はいつか衰えるけど、頭の良さは一番長く使えて無限だらって。それを可能にした器用さや努力は尊敬するが、それゆえ人生イーजीモードになっちまったのかな。

「糸杉は診察よりオペのほうが頼れるからって、俺にデリカシーがないみたいだろ」
そう言っているんだよ。を飲み込んで、苦笑を代わりにした。

「んで。彼女にはバレてないのか？」

え？

「山口千世。再来週、俺がオペする患者。蓮の彼女だろ」

ああ、うん。唐突に話題を振られ、曖昧あいまいな返事になってしまった。

「コンタクトにヅラしてるからって、声で気付かれるかもしれねえ。もしやりづらかったら、俺が診察代わってやるぜ」

俺も一応、オペの時は顔見られねえようにするし、と付け加えた。糸杉がセッティングした合コンで出会ったんだ。そりゃ分かるよな。

さっき僕をからかったドヤ顔もニタニタもない、涼しげな表情。たまに狙ってないのに気を遣えている時がある。不意打ちはやめてほしい。そんな糸杉に対して、トキメキに似た感情を覚える自分もやめてほしい。

言いたいことを言って満足した糸杉が、出ていこうとする。

その背中に、言葉を投げていた。無意識に呟つぶやいていた。

「糸杉はどうして、マイペースハートを付けたの」

扉の取っ手へ伸びていた糸杉の手が止まる。

デリカシーがないのは僕のほうだ。とっさに気の利きいた言い訳が思い浮かばない。

「マイペースだから」

振り向いた糸杉は真剣だった。

「最期の一瞬まで、自分の人生だって、コントロールしたいんだよ」
そしてはにかむ。

マンションの一室に鍵をさして回す。ドアを引けば、玄関にある僕と千世の靴たち。
おかえりは洗面所から聞こえてきた。ヘアバンドをした千世がひよっこり顔を覗かせ
る。メイクを落としていたんだろう、手には化粧水。服は診察室に来た時と同じ、白シヤ
ツとベージュのワイドパンツ。

ただいまを廊下に残して、僕は手前の自室に入る。スーツからスウェットへ。ノーネク
タイとはいえ、この解放感が僕を蓮先生から文野李人りひとにする。

リビングへ行くと、千世が七種類のボトルと卓上ミラーの前にいた。順に液体を取り出
し、両手で顔に押し広げる。

スキンケアもメイクもパツク一つで済む時代に、千世は古風こふうに手でやっている。塗った
後に頬をぺちぺち軽く叩くところが好きだ。

僕に気付いた千世が、隣の床を指す。「李人おいで」

言われたとおり腰を下ろして、かけている黒縁メガネを机へ置いた。すっと伸びた千世の小さな手に、僕の両頬は包まれる。

余分に出した時のお決まり。今日はクリーム。押し上げるようグリグリ塗り込まれ、自然に目が閉じる。

明日、お世話になった職場の先輩のお通夜なの。だから帰り遅くなるね。

わかったよ。されるがままふにゃふにゃの滑舌かっぜっで返す。河田さんのか。

ピタ、と動きが止まり、触れていた体温が遠のく。そっと瞼まぶたをもち上げた。「それとね」

一重の瞳に捉えられた自分。診察室に近い雰囲気やってきたこと、僕の肌は見逃さなかつた。

「私と結婚する気があるか、一週間半以内に決めてほしいの」

……え。えっ？

頭の中だけがぐるぐる動いている。情報を処理しようと、状況を理解しようと、目まぐるしく。

私たち、もうすぐ付き合って三年、同棲して二年だよね。歳も、私は三十三だし、李人も二十七。子どもを考えると、目標もなく一緒にいるのはどうなのかなって……

千世が発した文を、ただの音として受け止めるのに精一杯だった。

公に言えない職業、切れている親子関係。千世に言えていないことがたくさんあるから、僕は避けていた。

半開きの口から、千世に対する答えもこの場を紡ぐ言葉も出てこない。漏れ出るのは浅い呼吸だけ。

甘えるみたく見つめ返したが、千世は立ち上がってキッチンへ向かう。「あつたら同棲を続ける。なかったら私が出てく。李人の好きにしていよいよ」

さあ、ごはん。ダイニングテーブルにおかずを並べた千世が言う。

うん。ぎこちない動作で僕は食卓についた。

「へえ、結婚ねえ」三日前は頼もしく見えた親友の、心底興味あいづちのなさそうな相槌。

常に地下で働く自分たちが、地上に出るのは昼食くらい。昼の外はいつの間にも、こんな暑くなっていたんだ。長袖では汗ばむ。

結婚を迫る子でも、短命を望む子でも、なかったはずだ千世は。

期日は千世のオペ日。マイペースハートを付けること、僕が関わっているのか。ならどう関係している。

「長寿ワッペン外すのめんどくせえなあ。山口さん病弱でもないのに、子どもの頃から付けてるって意味分かんね」

サンドウィッチを飲み込んだ西見がぼやく。「変装用のヅラに青髪マッシュュを選ぶ文野のセンスくらい、分からんな」一言いらんどぞ。

長寿ワッペン。マイペースハートと対^{つひ}の存在。強制的に止まった心臓を動かす。ワッペンのように心臓に貼り付ける装置。

「晩婚の両親のもとに生まれた、待望の一人娘なんだって。溺愛と過保護の交差点でもらったのが、長寿ワッペン」

付き合いたての千世が言っていた。ちなみにうちの会社の物らしい。

「ああ、そういうや長寿ワッペン作ってる会社だったな」鼻先でフツと西見が笑う。

公園の時計は、昼休憩の終わりが近づいているのを教えた。僕らは再び地下へもぐる。

千世にとって大切であろう長寿ワッペンを捨ててまで。おまけに結婚。

「両親に逆らいたいのかもな」蓮先生に似てき、と西見は囁^{ささや}いた。独り言を言う僕を追い

越しながら。

トクンと胸が鳴った。でも、トキメキなんてかわいいものじゃなくて、細い針が勢いよく突き刺さった感じ。

この小さい穴が、絡まる思考の中に埋もれていた記憶を連れてきた。

西見と出会わなかったら。絶対に今の自分はない。

だから西見は浪人してくれていて良かった。おかげで同じ学年で名簿が連番になった。最初は西見にノートをせがまれる一人にすぎなかった。それが、文野のノートが一番分かりやすいと褒められ専属に。友人が数いる西見に、特別扱いされるのが嬉しかったな。

けど、親友であり恩人と思うようになったのは、就活を目前にした病院実習もくぜん。

それまでは、父さんが三代目を務める私立病院を継ぐと、疑わずにいた。もちろん実習先もそこ。西見と一緒に行っていた。

しかし封印したはずの違和感が、そこで顔を出した。僕が小四の時に亡くなったおじいちゃん。

身体の内も外も、たくさんの機械に繋がれて、絞り出される呼吸。どこにも合わない焦点。見るのも悲しくなるほど、苦しそうで辛そうで。そして怖かった。

それでも家族はおじいちゃんを、生きてるって言うから。神様から頂いた命、機械を使つた極限まで生きるべきって、言われてきたから。そう思い込むしかなかった。

現場では、おじいちゃんみたいな人は珍しくなくて、僕は生き地獄に見えてしょうがなかった。こんな悪い例えをする自分は医者に向いてないのでは、とこぼした相手が、西見。

「じゃあ、文野にとって死はどんなの？」

鼻をすする僕に、冷静な声色こわいろで問うた。泣く僕を前にして、西見の目線はノートに注がれていた。

「無理に機械を使って生きなくていい。自分の死期は、自分で決めるべきだ」

手の甲で涙を拭いながら吐いた答へと、この時思い浮かべていたおじいちゃんの青白い顔は、心に刻まれている。

ペンを置く音と同時に、文野、と西見が呼んだ。

「文野は医者に向いてる。ただ場所が違うんだよ」

思えばこれが、意思を持って西見が僕を励ました最初で最後だったかもしれない。

その後、西見のコネで今の会社に入った。両親、特に父さんには、医者ではなく会社員になる説明を何度も要求された。あまりにしつこくて、「機械人間ばかりの現場は嫌なんだ！」と、これまで長寿治療に熱を入れてきた父さんを否定した。ら、勘当かんどうされれば絶縁の現在に至る。

もし千世が俺と同じなら、本当の原因は親になる。

千世の両親、長寿ワツペンの件以外で聞いたことあっただろうか。

僕が自分のことを話さなかった分、僕も千世のことを聞いていなくて知らない。今更浮かび上がった問題。詮索せんさくされないうちに甘えすぎた。

カルテのほうが、僕より千世を知っている気がする。

背もたれに預けた体重を、腹筋を使って起こす。肺いっぱい診察室の空気を吸い込む。

看護師が扉の向こう側にどうぞと声をかければ、千世が入ってきた。オペ前に蓮として関われるのは、今日が最後。

「長寿ワツペンの件ですが」「はい、追加費用も払えます」

前回と同様、千世は落ち着いていてハキハキと話す。だが今回は、僕の心臓の鼓動もお

となしい。

「本当に、いいんですね。マイペースハートを付けても、長寿ワッペンを取ってもゆっくりした口調で聞いた。最終確認だと伝えるため。

注意深く、表情を窺うかがう。千世の口角こうかくが上がった。はい、いいんです。

「長寿ワッペンを取りたかったので、楽しみです」

え。素のまま発してしまい、まばたきを繰り返した。今、知らない千世がいる。

右手を胸に、千世は語る。「一人娘の私に長く生きてほしいからって、物心ついた頃、騙だまされるようなかたちで付けたんですよ」でも両親はもういない、と右手を握ってうつむく。

「ひとりで長く生きたい理由、ないので。マイペースハートを付けて自分らしく」顔を上げた千世と、視線がぶつかる。

「生きたいんです」

晴れやかな顔色で、満足気に微笑ほほえむ。

患者のそういう笑顔が見たくて、始めたんだった。

だのにいつから、いつの間に。死は作業なんて。なわけあってたまるか。

なら、機械で強制的に生かされたおじいちゃんは。機械で生きること**を強いた**父さんは。何が違うという。作業的な死と作業的な生。一緒だ。

マイペースハートは短命装置でも、自殺でもないはず。

生きることに希望をもたらず。生きるための夢。人によって輝きが違う、大切な死。

「もしかしたら彼氏と別れるかもしれないし」

いたずらっぽく言って、千世は目を細めた。

仕事終わりに、ガヤガヤした居酒屋で待ち合わせ。三年ぶり二回目の来店だが、まったく変わってなくて安心する。

もうすぐ着くよのメッセージがスマホ画面に表示された。水で喉のどを潤うるす。

しばらくして、カウンター席の隣に人が来た。僕の待ち人である。

お待たせ。わあ、全然変わってないね。私たちが合コンで会った時のまんま。

適当に料理を注文したが、どちらからともなくお酒は頼まなかった。

注文をとりに来た店員が去った後、数秒の沈黙。同じ屋根の下で暮らしているのに、変

によそよそしい。

「返事、聞かせてくれる？」千世が先に本題を切り出した。呼び出した僕がタイミングを迷っていたので助かる。

「千世と一緒にいたいと思うよ」胸ポケットに忍ばせていた小さい箱を、二人の間に置いた。

嬉しそうなほつとしたような、いろんな感情が混ざった表情を千世は浮かべている。

「でも」まだ僕の返事は終わってない。

隠していることがある。お互いに、あると思う。

ベルベットの箱へ伸びていた千世の指先が、かすかに震えた。

千世を真っ直ぐ見つめる。向き合いたいから。

「マイペースハート」

肩をビクツと跳ね上がらせ丸い目をした。徐々に引いていく手が怯おびえてることを僕に伝える。

まず、僕から言ってしまうよ。長寿ワッペンを作る会社に勤めているって言ったけど、本当に扱っているのは、マイペースハート。これは家族にも言っていない。

千世の反応はない。そのまま続けようと息を吸ったら、遮さへぎるものが現れた。注文した二人分の焼き鳥。気を取り直すため、口に水を含んだ。

実家とは縁が切れていると言っても過言じゃない。僕が私立病院の四代目にならず、出てきたから。三代目の父さんはじめ、長寿治療に熱心なところについていけなくてさ。

そうなんだ。周りのオヤジたちの喧騒けんそうにかき消されそうな千世の声を、たしかに拾った。

「長寿ワッペンを付けて長生きしたい千世と、合わない結婚できないって、勝手に決めてた」ごめん。

最後を言う前に、左手でグラスを掴んだ。ちょっと話すと喉が水分を求める。

「私、明後日マイペースハート付けるよ」

焼き鳥の串を持ち上げ、食べた千世。咀嚼そじやくしている間、僕は千世の耳元で揺れるパールのイヤリングを眺めていた。

李人は長生き派だと思ってた。あと、私のこと好きじゃないって思ってた。

だから振られると思った。

正面を向いたまま、千世は笑いもせず言った。忙せわしない厨房の景色と騒がしい周囲。まるで僕たち二人だけ、時に遅れているようだ。

「なんで、そうなる」

僕の問いにチラッと横目をくれた後、誤魔化ごまかすみたいに小さく笑い声を漏らした。「だって私、かわいくないでしょう?」

若くない、美しくない。なのに整形しない。便利な物に頼らない。

『意地張ってないで、千世ちゃんもパックメイクにしたり、二重にしたりすればいいじゃない』

頭に流れた声は、千世と出会った合コンに来てた女のもの。千世より十上で、あの時四十だったか。ハッキリと顔を思い描けないが、年齢よりずっと若々しい恰好だった記憶が残っている。シミが全然ない肌で機械と美容の話をしていたから、苦手なタイプだなとぼんやり聞いていた。

覚えてるかな? 先輩にパックや整形を勧められて困ってた時。李人が私に言ってくれたこと。

左耳に髪をかけた。覚えているよ。その時千世が、今とおんなじ仕草をしたことも。

「自然の美しさ、素敵ですね」って。嬉しかった。

むなしくなる時がたまにあったの。長寿ワッペンや親の思いに歯向かいただけなのか

もって。

「そんなことで老いる私と、李人はどこまで一緒にいてくれるのかな」

千世が話すのを止めた。グラスに口をつけ、串に残った鶏肉に噛みつく。

「どこまでもいれると思う」

だって、僕の好きな千世のまんまでいるのだろう。

人工的にでもみんな二重にする今や珍しい一重に、僕は今日も目を奪われている。「周りに何を言われても、自分を磨くよう丁寧生きてきた千世に、僕は惹かれたんだよ」

自分が思っている以上に真面目なトーンで、しかも目を合わせた状態で言ってしまった。それを自覚した途端、むずがゆい恥ずかしさが遅れてやってきた。

僕はこの照れから逃げたくて、置きっぱなしになっていた箱を開けた。指輪のきらめきが僕にプレッシャーを与える。

「結婚しよう。一緒に僕らしく生きよう」

おあずけをくらっていた返事の最後。

両親や環境のせいにして逃げるのは終わらせなきゃ。どう生きるか考えたい。そこに千世もいてほしい。

「うん」

指輪を取り上げた千世の手。そのまま細い指を滑って、左の薬指が輝く。お願ひします。そう言って、笑うと目がなくなる千世が愛おしい。

凍る足にひまわりが

四年で、二人がいなくなった。狭かったはずの実家をもてあそぶ。

ちゃぶ台に散らばった新聞とどうでもいいチラシを払い落とし、空いたスペースに母の遺骨を慎重に置く。申し訳なさそうに鳴ったコツンという音が、やけに響いた。

黒ネクタイを右へ、ジャケットを左へほうる。締めつけられていた首と身動きができなかった肩を、喪服から解放してやった。ついでに履いていた靴下も投げる。

怒られない。誰にも迷惑をかけていない。

これが、二十九歳男性の一人暮らしなのだろうか。

テレビを真正面にかまえる座布団に、脱力しつつあぐらをかいた。手探りで捕まえたりモコンで、テレビをつける。

突然、騒々しい話し声とゴテゴテのテロップが、重い空気で充満した部屋へなだれ込む。すぐに消した。

「はあああああああ」

腹の奥底から吐き出したため息で、さらに重みを増す室内を数歩歩く。冷蔵庫に眠る安い発泡酒を掴み、また戻る。

タブに指をかけて開けたら、プシュツと言った。かわいらしい悲鳴だ。ふちに口づけて、

缶を斜めに傾ける。

「——ッハッ」

机に叩きつけるよう酒を置いた。ごめん母さん、ビックリさせたかも。

今度はそおっと、骨箱こつばこの後ろに隠れた、先ほど落ちきれなかった一冊のノートを拾い上げる。

今朝、母さんの枕カバーの中から見つけた。

自分の名前が書かれた、身に覚えのない日記。

よく聞くメーカーのロゴが入ったシンプルな黄色いノートを、一ページめくる。

十月三日

涼太が帰ってきた。なんの連絡もなしに、急に。

駅からはタクシーに乗ってきたんかな。言ってくれば迎えいったよ。

涼太は俺が嫌いでも、もっと頼ったらいいんだ。兄弟なんだし。

二年ぶりに見た涼太は、ヒーローをつくりに街へ行った自慢の兄ではなかった。

一卵性双生児ってやつだから、瓜二つなのは当たり前。けど、田舎で農家をする小汚い俺より、きれいでツヤがあったはずだ。

「ごめん、陽太」

玄関に入って一番に、そう言われた。呟いたような、消えそうな、どうしようもない。ただいまを言わないと怒るのは涼太なのに、俺のおかえりは一方的になった。

「飯は？」

「いいよ」

ポストンバックを居間に置くなり、涼太は母ちゃんがいる隣の寝室に向かった。

「母さん……ただいま」

少しためらったのは、母ちゃんがベッドの上で座っているだけの無気力人間になっちゃったからか。

「……………涼ちゃん！」

久しぶりにあんな弾んだ母ちゃんの声と、人を正確に呼んだのを耳にした。

それから母ちゃんは、子どもみたいにはしゃぎながら、涼太にあれこれ聞いていた。

「どこに住んでるの？ お仕事は何をしてるんだっけ？」

きつと答えに困っただろうなあ。その仕事が大変なことになってるの、地方ニュースでやってても、覚えられない今の母ちゃんには意味ないもんね。

つーか母ちゃん、涼太のことはわかるんだ。

俺のことは「おにいさん」って呼ぶのに。三年前の冬にボケはじめてからこれまで、世話してるんだけどな。

二人がしゃべっているのを横目に、いつもの二倍布団を敷いた。

なんか寂しい。まるで心が吹雪いたかのよう。

十一月四日

『オイルレンジャー』の「サンフラワー」が大好きだ。

地元局がやっていた特撮ヒーロー作品を、年長ねんちようでリアタイして、小一で誕生日もクリスマスもお年玉も全部はたいてDVDをそろえたヤツは、たぶん俺ぐらいだろう。

それでも「サンフラワー」は最高にカッコいい、真のヒーローだ。

自分がどれだけ大けがを負って劣勢れっせいだろうが、目の前で困っている人を助けるまでは、絶対にあきらめない。

手段を選ばないため、仲間とぶつかることも多かった。でもそのまっすぐな思いが、士気を高めて解決につながる。

一目ぼれとはまさにこのこと。出会った時から、俺の夢は「サンフラワー」だ。

そんな「サンフラワー」がまさか、涼太によって逮捕されるとは。

夢にも思わなかった。ショックだった。

けれど、ヒーローは横領おつりようをしない。変身や強化をするたびに光っていた、右足首のひま

わりの模様がペイントだったように、所詮は演技。

そういう意味では、涼太は「サンフラワー」を守ってくれた。

しかし、涼太はヒーローの表情をしていない。

名前こそ出ていないものの、注目を浴びる渦中の人物（かちゅう）になってしまったことで、世間の目が気になるらしい。異常なほど。

現に毎日鳴り響くスマホを、ずっと無視している。

一カ月間、何も言わずそつとしておいたら、とりあえず自力で動くニートにはなった。が、相変わらず気力はない。

いつまでもこうしているわけにはいかないこと。わかっているはず。

少なくとも、会社はどうにかしなきゃ。

ポツポツ飯を食う涼太に切り出した。

「なあ、これからどうすんの？」

生気を失った目が合う。ボサボサの黒髪の中でかくれんぼをしていたのを、やっと見つ

けた。

「もういいかい？」と聞きたい俺と言いたい涼太の沈黙が、しんしんと降っていく。

我慢勝負に負けたのは俺。

「か、髪、伸び放題だな。一緒に切りにいかん？」

乾いた笑いが壁に溶ける。その時、ひらめいた。

「俺が……涼太のフリして、会社行くか」

「……………は？」

言ってしまう。もしかしたら、変わるかもしれない。

「俺たち顔はもちろん、背かっこうも似てるんだ。髪を切って見た目を整えれば、バレないんじゃないか？俺が涼太の代わりに会社へ行って、涼太はその間、俺の代わりに畑と母ちゃんを見てくれれば！」

「無理だ。タトゥーがある」

あ、そうだ。高二で入れた、光らない本物のひまわりが、俺の右足首で咲いている。

「それは……ハイソックス履けば」

「あるものはね。ないものはどうにもならんだろ」

涼太がハンバーグに箸を入れる。

たしかに、シールでも俺みたいは大輪の花は見たことがない。しかもカラーの。

「……じゃあ、彫れば」

みそ汁のおわんを片手に、むせる涼太。そしてケラケラ泣き出した。

涼太って、肩を震わせて笑うっけ。

「タトゥーか、ひまわりの。……いいね、思い出に」

十一月二十五日

おそろいの印を刻んで、入念な準備をした。

「じゃあ、陽太をよろしく」

涼太の荷物を持ち、母ちゃんと畑を任せて家を出た。

その瞬間から、俺は涼太になった。

今度は俺が、涼太を守る「サンフラワー」になる。

ミッションは単純。退職できればいい。

しばらく無断欠勤していたので、やっぱり視線は痛かった。

けれども、一度行ってみたかった『オイルレンジャー』の会社へ、社員としてスーツで堂々と入った高揚感のほうか、実は勝っていた。

隣の席の女の子が、同期の「ユハラ」さんね。「油原」は教わらなきゃ読めん。……けっこうかわいい。ハムスターみたいで。

彼女が特に、俺のことを気にしていたと思う。

まあそうか。仕事というより机の片づけをしていたし。

今日、涼太のUSBの一つが、鍵つきであることに気づいた。

交換したケータイでさえロックされてなかったくせに。

俺が知ることすらもダメな、涼太の教えたくも見せたくもない部分。

寂しいじゃんか。悔しいじゃんか。俺は涼太を救いたいんだよ。

そういう気持ちで、パスワードを当てようとした。ただの好奇心ではないと言いたい。
3266。母ちゃんと俺らの誕生日。

そこには、涼太が秘めていた正義が、二つあった。

十二月二十日

帰省か帰宅か、よくわからない。いや召喚か。

「帰ってこい」

と、昨夜かかってきた電話で、涼太に言われた。

落ちて着いた兄ちゃんの声が、耳の穴から吹きこむ。その温かさに、思わず甘えかけて。

「おにいさ〜ん？」

電話越しのためかすかだが、滑りこんできた母ちゃんの言葉でふんばる。

「はいはい。ちょっと待ってて、母さん」

「じゃ、明日」

涙が出てくるのが怖くて、返事も待たず急いで切った。

逃げたって思ったかも。否定できない。

そろそろ終わりなんだろう。

「憧れの会社が辞めたい会社になって、最後には潰した会社になるなんて」

涼太がポツリとこぼした。間違っていることを。

短い尺^{しゃく}だったが、全国に流れたのは事実。社長の詐欺が決定打になり、涼太の会社はまもなく倒産するに違いない。

だけでもそれを打ったのは、涼太を名乗った俺だ。

プツリと一瞬で、画面が黒に染まる。

「もういいよ」の合図。

「入れ替わりを解消しよう。陽太」

白米が食道につもった。厄介な感情がつのりだす。

「陽太になって、大切なことを学べた気がする。

今まで、周りと完璧に合わせて問題を起こさないことが、正しいと思ってた。だから……死にたかった。

騒動になって、普通から外れたから。

でも、もうすべて大丈夫だよ。全部ぜんぶ陽太のおかげだ」

俺をとらえる瞳は、何にも遮かくられていない。

「ここで暮らそうと思う。

仕事は決まってるないし、母さんの介護もあるけど、陽太と一緒になら何とかなると思うん

だ。

「家族三人でいれば、きっと幸せになれる」

涼太が後頭部を見せた。結ばれた髪とツナギが、いつの間にか似合っていた。

「ありがとう。なりすましてくれて。ごめん」

次は俺の番だ。

早くしないと、静寂せいじやくが二人を冷やしてしまう。

「なんでサンフラワーの横領は公表して、社長の詐欺は公表しなかった？ どっちも知っていたくせに」

てつきり勝手にしたこと、怒ってるもんだと思っていた。

「守りたかった。……陽太と油原さん、どっちも」

その夢を、俺が壊した。社長が油原さんのお父さんだろうかと、気づいていながら。

本当は、ほんとうは全部わかってたんだ。

俺は「サンフラワー」はおろか、ヒーローにもなれないこと。

涼太のほうがはるかに、「サンフラワー」に近いこと。

「サンフラワー」なら、詐欺にあった人の前に、まず油原さんのことを考える。

「サンフラワー」なら、たとえ名前を呼んでくれなくても、母ちゃんの介護をわずらわしいと思わない。

「サンフラワー」なら、学歴がないことを言い訳にせず、努力する。勉強して転職したり、楽しみを探したり。

どんなに不利な状況に立たされても、絶望しないで向き合うんだよ。

うらやましいからって、弱ってるところを襲って、涼太を奪ったりしない。

「涼太の名前でめちゃくちやした。責任をとりたい」

「いない」

「涼太になりたかったんだけど、なれなくてごめん」

「全然いいよ。陽太に戻ってくれれば」

すっかり夕飯の時間が進みだした。

わがままは届かない。直接も言えない。

一カ月半ぶりに、陽太がかえってきてしまう。

許せない、このままじゃ。

最期くらい、ヒーローらしく。「サンフラワー」になろう。

翌日、涼太が自殺した。

忘れることなどできない、三年前の朝。アラームではなく、コール音で目を覚ました。タクシーに乗っていったんかな。まったく気づかなかったから、たぶん真夜中に。

俺が借りているマンションで、俺の身分証を抱えて。

焼かれていた、枯れていた。陽太が、ひまわりが。

日記ってタイトルのくせに、とびとびなのが陽太らしい。大事なことをきちんと残してくれていることも。

おかげで確信した。あれは『オイルレンジャー』最終回の「サンフラワー」だ。

四人のメンバーにヒロインを託し、自分は燃え盛る炎の中心で一人。まるで太陽の中にいるかのように。

よかったな。陽太はちゃんと「サンフラワー」だったんだよ。

葬式中、母さんは泣きつづけていた。ワンワンとシクシクを繰り返しながら、「陽ちゃん陽ちゃん」と陽太の話をした。

周りはショックとボケで記憶が混ざっていると思っただろうが、すべて陽太のものだった。

陽太が涼太のまま亡くなって以来、俺は強制的に陽太を生きている。

「涼ちゃん」

母さんが息を引きとる直前に、そう言うまで。陽太と呼ばれる自分に慣れてしまっていた。

ボタツと、大粒の雫しずくが紙に着地した。慌てて拭きとり、陽太の日記を母さんの骨箱のそばに添える。

両目からぼたん雪が止まない。鼻をすすると奥が痛い。震えながら吐く息は白い。俺さ、陽太になりたかったんだよ。

いつだって揺るがない信念を持っていたのが、強烈にまぶしくて。

『オイルレンジャー』の会社にしたのは、それが理由。

水の膜まくのせいで視界が悪い。

陽太へ未練があることが、涼太たらしめる。ならば忘れたい、忘れたいや。

俺はこれからどうすんの？　なあ、陽太。

手の平でまぶたをこする。すると、右足首のひまわりが輝いて見えた。俺に向かって花びらを広げて、アピールしてるみたいだ。

キンキンに冷えた足である。

この足を凍らせてはいけない。でも一本だけじゃ歩けそうもない。
右は陽太だから、涼太は左に彫ればいいか。
俺たちは双子、二人。そうだな、陽太。

愛を噛む

夜の海に呼ばれた。好きな子から。

花火は先ほど終わった。砂浜から上ってくる、祭にのぼせた人々に、僕は逆らう。全力疾走するには、ビーチサンダルでは痛い。

けれど、右手の中で握られたスマホに、憧れの彼女のメッセージがあるから。山を流れる川のごとく、僕は駆け降りた。

彼女は、学年で一番身長が高い。おまけに、水泳部で最速だ。チビでによる泳ぐ僕とは、全然違うんだ。

でも、高校生になった来年こそは、選手になって、彼女と一緒に大会に出てみたい。だから、みんなが距離を置く彼女に、僕は一步踏み出した。

「ねえ、なんでそんなに、速く泳げるの？」

「……みんなが言うとおり。背が高くて、口が大きいからだよ」

プールサイドにある給水機の前。振り向いた彼女の、瞳は揺れていた。

僕は初めて、その目に深い緑が宿やどっているのを見た。

「まなか！」

波の音だけだった砂浜に、響く僕の声。

浜辺に突っ立つ、一人の女の子へ歩み寄る。近づくと、紺色に白の花を咲かせた浴衣を、青緑色の帯で締めていたのがわかった。

「うなぎくんの黒髪、闇に溶けちゃいそう」

「まなかも」

彼女の長い髪と袖、僕のTシャツとハーフパンツ。軽やかな素材はぜんぶ、海風になでられて、暗闇の中でなびいた。

「この一カ月の間、うなぎくん、すっごく部活頑張っていたから」

まなかが片足ずつ丁寧に、下駄を脱ぐ。

「速く泳げる秘密、うなぎくんにだけ、教えてあげる」

そう言って、まなかは沖へ引き寄せられる。

「待って!!」

僕はばしゃばしゃと騒がしく、波を蹴散らし追いかける。

そして細い手首を掴まえた。

その刹那、僕は海の中へ吸い込まれた。

「わっ………ふっ………!!」

僕が吐いた泡が、顔にぶつかる。

重い水圧を、まぶたは押し上げた。

「!!」

愛囁は、大きく口を開けて、笑っていた。ラブカのように。

「うなぎくんも、鮫になればいいんだよ」

おまえとデートなら

すっぴんでいい

家を出た瞬間、隣に住む幼馴染、愛香あいかに遭遇した。

俺にとつては早い、朝八時。コンビニにふらっと行くだけだったから、よれたTシャツにハーフパンツ、寝ぐせをつけたまま会ってしまった。

幼馴染とはいえども、高校生にもなると、なんか気恥ずかしい。

それに愛香のほうは、朝八時にしては、派手にめかしこんでいる。女子に休日の朝のだけだった時間は、存在しないのか？

「よ、よう！　こんな時間から、もうお出かけ？」

軽く挨拶だけすればいいものを。頭では分かっているのに、なぜか話題を振ってしまった。

「そうよ。デート」

愛香が何げなく言った一言に、俺は耳を疑った。

「えっ、で、デート？」

「そう、デート」

愛香がカギをポシエットにしまいながら答える。

そんな相手が愛香にいたなんて、聞いていない。

愛香の話は、愛香の母さんから俺の母さんを通じて、ほぼ全部筒抜けだ。

だから嫌でも、お互いのことはよく知っていることになる。この前のテストで、俺が英語の赤点を取ったこともな！

俺が知らなかったということは、愛香は母さんに隠していたということか。

それを、俺のささいな質問で暴露しちゃってもよかったのか？

「そ、そうか。大丈夫、母さんには言わないから」

「別にいいよ」

余計な事を言わせた気になっていたが、それにしても愛香は平然としている。

「変な誤解されたくないから言うけど。今日デートする人は、本命じゃない。本命は別にいる」

愛香が俺を、まっすぐ見つめて言う。

「はっ、そんなおしゃれして会う相手が、本命じゃないとか！信じられるかよ、そんな言い訳。ホント大丈夫だって。俺も赤点のこと言われたくなかったし、そういうのはちゃんと黙ってるよ」

へらへら笑いつつ、俺は普段と違う愛香から視線をそらした。

俺のよく知っている愛香は、ゆったりしたTシャツワンピースに黒縁メガネで、髪を無造作むぞうさにおろしている姿だ。

花柄ワンピースを身にまとい、メイクをしたポニーテールの女の子ではない。トレードマークの黒縁メガネも、今日はコンタクトに取って代わっている。

俺がからかったのに、愛香はすごく静かだ。

もしかして、怒った？

俺は恐る恐る愛香の顔を見た。

「本当だよ。本命の人には、こんなにおしゃれしたの、見せたことない」

俺の心臓が跳ね上がる。ついさっき俺が考えていたことを、見透みすかしたような着目点。

「そ、そうかよ」

幼馴染の恋バナを聞くのは、こんなにもむず痒がゆいものなのか!?

「だから今、初めて見せたね」

「えっ?」

愛香がいたずらをしたみたいに笑う。

「お前とデートなら……」

「一步一步、愛香が俺に近づいてくる。

「すっぴんでいい！」

ニカッと、愛香のまぶしい笑顔が、俺の目の前で弾ける。

俺の心臓は止まった。

「……ねえ、この意味、わかる？」

愛香の真剣なまなざしに、俺は息をのんだ。

動き出した心臓は、急激に加速する。

幼馴染の愛香相手に、なんで俺の心臓は……こんなうるさくなるんだ?!

カ ノ ン と 五 分

カップ麺に、湯を注ぐ。線のところまで入れ、蓋をする。

ズボンのポケットに入れていたスマホを取り出し、タイマーを五分にセット、スタート。スマホを片手に、カップ麺を持ってキッチンから離れる。

テレビの前のローテーブルにカップ麺を置き、自分は座布団の上にドガツと腰を下ろす。スマホを開き、あるゲームにログインする。

(五分あれば、一つクエストを進められそうだな)

すると彼女がやってくる。

「ねえ、潤じゅん。またゲーム？ ちょっとはかまってよう」

バックハグしてくる彼女。黒のダボツとしたトレーナーワンピースの袖から見える、華奢きゃしゃで色白な腕は、きつと柔らかいに違いない。

「いつもかまっているじゃないか」

僕は少し面倒くさそうに答えながら、彼女のほうを振り向く。

不機嫌そうな、ふてくされているような表情を浮かべる彼女の名は、カノン。

僕の彼女である。

「いつもゲームばかり。潤はカノンのこと、大切じゃないの？」

カノンが上目遣いで聞いてきた。その表情が、かわいくてたまらない。

「大事だよ。大事だとも」

姫カットされた触覚をかき分け、カノンの頬に触れる。

カノンが満足そうに微笑^{ほほえ}む。首を傾けたので、黒髪のツインテールが肩から落ちる。

カノンの機嫌が直ったのを確認して、僕は再びゲームへ戻ろうとした。クエスト開始ボタンをタップ。

すると。

「ぐえっ」

カノンが腹をえぐるように、腕に力を込めてきた。思わず声が出ってしまった。

「ウソつき。……じゃあなんで、最終日、投票をサボったの？」

最初はまだあった冗談交じりの声色こわいろも、最後にはなくなっていて、真剣そのものだった。

カノンは怒っている。背中越しからでも、伝わってくるだろう。

だがしかし。クエストは始まってしまっている。待つてくれる系のゲームではない。そしてリタイアもできない。正確に言えば、リタイアすると体力が減るのでしたくない。

仕方なしと思って、バトルを開始する。

「……………」

カノンの無言の圧。なるべく早く終わらせるべき状況なのだが、終わらせたくもない気がする。

突然、カノンが腰をくすぐってきた。

「ちよっ、カノン。や、やめっ。あと五分でカップ麺が出来上がるから……！ 邪魔しないでくれ。待てないのか!？」

「カノンが待てないのはカップ麺じゃないよ」

低いトーンでカノンは言う。僕をくすぐる手はやめない。

カノンは指が細くて綺麗だから、器用そうなイメージがある。くすぐりも、指を細かく速く動かして、うまいはずだ。

と、カノンに気を取られていたら、スマホ画面いっぱい「YOURROSS」の文字。

「あーあ、負けちゃったね。カノンの相手したほうがよかったよね？」

カノンのやけに明るい声が響く。

「それでえ？ さっきの話の続き。どうして最終日だけ、投票してくれなかったの？」
猫なで声で、カノンが僕に問う。

「投票開始日から毎日、欠かさずしてくれていたのに。最終日だけ……わざと？」
冷たく、責めるように僕に言う。

「いや、わざとじゃない。ただあの日は……寝落ちてしまったんだ！ もちろん、しまったと思っただよ。でもどうしようもできなくて。僕があと五分、早く目覚めていればっ」

「カノンのこと、どうでもよくなっただんせよ！ みんなそうだもん……頑張っても意味ないって。存在はモブではないけど、実力がモブだってっ……」

怒鳴^{どな}って僕の話^{せいきご}を制御^{せいぎよ}したかと思えば、どんどん尻すぼみになっていく。

カノンが鼻をすすったのが、聞こえた気がする。

「違うよ。確かに、みんなはカノンのことを強いと思ってないし、メンヘラでかまってちゃんな性格のことを、周りに居そうと言って煙^{けむ}たがっているけれど……僕は違う。カノンの

強さも性格も、全部含めて好きだよ！」

カノンにちゃんと伝わるよう、強くハッキリ言った。

これで今回の失態がチャラになるとまでは思っていないが、少しでもカノンの気が静まればいい。

「次、人気投票があつたら、最終日も必ず入れる。あと一票でグッズ化だったんだろう？次は絶対に大丈夫だ。僕という彼氏を、信じてくれ」

しばらくの沈黙の後、カノンがようやくやく口を開いた。

「本当に？ 潤のこと、信じるよ？」

そう言つて僕に見せたカノンの笑顔が、かわいすぎる。

と、僕の彼女が甘えてきたら嬉しい。

けど、そんなことは一生ない。

僕の彼女、カノンは、ゲームのキャラクターだから。

二次元、画面の中。

しかも、カノンのいるゲームは、あまり知名度がない。

ピピピピピピ、ピピピピピピ。

スマホのタイマーが鳴った。カップ麺が出来上がった。勢いよく蓋を開ける。
五分で、カップ麺も、カノンとの妄想もできる。

けど、カノンのグッズ化は逃す。

物理的には、数字的には、同じ五分なのに。

新月

俺は月が嫌いだ。

なぜなら『月』を題材にした作品が思い浮かばないからだ。

今日の午前、担当者が来た。最近の執筆活動を尋ねられた。認めたくはないが、行き詰っている以外の言葉で現状を表現できなかった。

この担当者とは、昔一度小さな賞を受賞してデビューすることになった際に、お世話になった人だ。面倒見の良い人で、今は共にやる仕事がないのに、近くに来たとき必ず寄ってくださる。俺のさびしい一人暮らしの、数少ない話し相手だ。

「では、題材を他の人からもらったらどうだろう。何か一つ、単語をもらって。少し縛りしばのあったほうがいいかもしれない」

「だが僕には、そのようなことをしてくれる友人がいません」

「それならいるじゃないか、私が。私で良ければ、題材を与えますよ」

少し面倒な気もしたが、この人は信頼ができる。お試しくらいの軽い気持ちで、題材をもらうことにした。

「うーん、そうだなあ。いざ決めるとなると迷うものですねえ。この世にはたくさんのお話がある。ありすぎる。うーん……」

俺は題材を予想して待った。俺の得意分野だと良い。

「あつ、月なんてどうでしょう？」

「月？」

「はい。私は大学時代、天文学サークルに入っております。この間、当時の友人と飲んだことを思い出しましてね」

「はあ」

月。天文学。全然詳しくない。

「ああ、でも、月が入っていればなんでもいいので。そう難しく考えずに。どうでしょうか？」

（月を断って、また別の単語が自分にとって都合が悪いと嫌だなあ）

「まあ、はい。わかりました。月を題材にして、ちょっと考えてみます」

そのような話をしたら、次の仕事があると言って担当者は帰っていった。忘れないうちに、「月を題材にして書く」と紙に走り書き、壁に貼った。

月について考えてみる。

俺は勉強ができたほうではないので、月についての知識は小学生程度で止まっている。

いや、小学生のほうが詳しいかもしれない。

(月って、自分で光ってるわけではないんだよね？ 太陽に照らされてるんだっけ？)
うん。明らかに習ったはずなのに、俺の中では不確かになっている。

だがすぐに調べるのはもったいない。自分が思う月の知識を全部出しきってから、答え合わせとしてネットで検索しよう。

俺は積まれたプリントを一枚とり、メモしていく。

まず、月は自分で光ってはいない。イコールでつないだ横に、太陽に照らされている。

改行をして矢印を書く。日食、月食。

驚くことに、俺のメモはこれで終わった。

想像以上に俺の頭は空っぽのようだ。

悔しいので、もう少し粘ってみる。

しかし、知識というのは頭の中で生産されるものではない。外から入ってくるものだ。

それを普段は溜めこんでいて、必要なときに出す。その倉庫にもう知識が入っていないのだから、いくら待ってもこれ以上メモに書けることはない。

自分の頭を恨めしく思った。深いため息がでた。

しかたがないので、視点を交えることにする。

自分の記憶の中から、月に関するものがないか、くまなく探す。すると、大学生だった頃のことが思い出された。

俺は大学二年の時、デビューをした。

夢が叶った。そしてこれから、俺は夢の道に行く。

人生で一番、希望に満ち溢れ輝いていた。

すぐに次回作を書き、二冊目を出す。

担当者は難しいことだと言ったが、心意気は十二分にあった。

でも、現実はそのまうまうはいかない。気持ちだけで、どうこうならない。

デビューをしたというプライドが、納得する作品をどんどん作れなくした。

このチャンス逃したくはない。

一生に一度かもしれないんだ。

この流れに乗って早く二冊目を出さなければ、皆が俺を忘れてしまう。

みんなが俺を作家だと、認めなくなってしまう。

毎晩、そんな思いに駆^かられた。

一日が短い。

また月が昇ったら、デビュー作から間が空いてしまう。

みんなが俺のことを忘れてしまう。

当時の俺は、月が出ることで、今日と明日の境界線を強く感じていた。そして苦しんでいた。

月が出なければ。太陽がずっと照らしてくれれば。

思い出した。俺は題材を『月』にされる前から、月が嫌いだった。

そしてこれからも嫌いだろう。

月は俺を、人生の挫折へと導いた。

時間がない、時間がない。

とにかく俺には時間がない。

焦る気持ちだけが暴走した。

そのせいで失ったものは大きい。

デビューから三か月後、俺は友人からの誘いを全て断った。理由は二作目の執筆活動のため。

最初は「頑張れよ」「期待してる」と言ってくれていた友人たちも、いつの日か誘いはもちろん、声もかけてくれなくなった。

あとから聞いた話だが、俺が誘いを断るようになって半年後、友人らはキラキラ一軍グループの奴らに笑われたそう。俺のことを話して。

俺は深く狭い交友関係だったが、彼らもまたそうだった。だから、友人のことを顧みず執筆活動に明け暮れる俺でさえも、信じてくれていたのだろう。

しかし、その一件で彼らの気持ちは変わってしまった。

気づいたときには、彼らは一軍組と行動を共にしていた。

地味だった服装は、アクセサリや柄物の服によってうるさくなった。真つ黒な髪の毛派手になり、顔と似合っていないかった。

そのような輩やからになったので、当然俺のことも学内で広められていた。

デビューはしたものの、俺の名は轟とどろいていない。おまけにペンネームだったし、書いた

のはラノベのラブコメ。

ペンネームもばらされ、二作目も出ていない状態だったので、『自称小説家』のレッテルを貼られた俺はすぐに有名になった。

「過去の栄光にすがってる」と囁かれたことは、何度もある。

歯を食いしばらなければならぬほどの悔しさと悲しみに襲われたが、それもこれも、すべて二作目を出せば良い話だ。

けれども、書いても書いてもダメで、月日だけが流れた。

もう、就職活動の時期になっていた。

友人をないがしろにしたつけがここで回って来た。

どこに行っても一人で、誰かに不安や不満を言うことも、相談にのってもらうこともできなかった。

入ってくる情報量も少なく、就職活動は苦戦した。

当たり障りのない卒論を書いて卒業をしたが、大学の門の前で群がる人を避けながら、俺はそそくさと帰った。

社会人になったら、一からやり直せる気でした。

小説家であることは隠し、そつなく仕事をこなし、帰ったら小説を書く。

一作目からずいぶん時間が経ってしまったことは少々許し難^{がた}かったが、新居に吹き込んだ春風で流れたことにした。

引つ越しの片づけが終わった部屋で、俺は気合いを入れ直したのだ。

二作目を出すことは諦めていなかった。

はずだった。

執筆活動の時間を確保するため、定時で帰れる小さな工場に就職した。

収入は多いほうではなかったが、家賃が安いボロアパートで暮らしているので問題はない。

それにずっとここで働くつもりもない。

二作目を出版するまでの、一時的な社会での身の置き所。通過点である。

機械に取って代わられそうな仕事内容が苦になるのではないかと心配していたが、それはまだ大丈夫だった。

それよりも、会社の人間関係のほうだ。

流れ作業をしているだけなのに、上司が口うるさい。

そのくせ飲み席ではやたらと絡まれる。

俺はそんなに酒は飲めないと言っていたのだが、新入社員が俺だけなのもあって、付き合わざるを負えなかった。

最初は小説どころではなくて、新しい生活に慣れるので手一杯だった。

生活リズムが定着してきても、職場でのストレスを言い訳に、前よりは明らかに書かなくなつた。

だから今も俺は、通過点で滞とどまっている。

月のせいで、つまらない過去がよみがえつた。

ここまで考えても、『月』を題材とした新作のネタは思い浮かばない。

無駄なことはばかりで頭を埋め尽くされ、疲れてしまった。

ペンを放ほうり、布団に転がる。

お腹が空いているが、何か作る気にも買いに行く気にもなれない。

しかも午後三時半と、時間が微妙だ。

眠つてごまかしてしまおう。

まぶたを閉じ、眠りに入る。

目が覚めたら、外はすっかり暗くなっていた。

もう七時。よく寝たものだ。

テレビをつけて、夕飯の支度をする。

料理のできない俺のレパートリーなんて、

インスタントラーメンの味の種類の数くらいだ。今日はみそにしようか。

飯を食い、食器を片付けた。

しばらくぼうつとバラエティー番組を見ていたが、面白くない。CMになったタイミン
グで、チャンネルを変えた。

一局ずつ見て回る。ピンとくるものがないので、無難にニュースにした。

天気予報のコナー中のようだ。現在の街の様子が映されている。

「今日は新月で——」

天気予報士がごちゃごちゃ言っている中、その部分だけ耳が強く反応した。

今日一日中月のことを考えていたのだし、月というワードにいつもより敏感びんかんになってい

るのは確か。

さらに『新月』はメモに書いていない。慌ててさっきのプリントに書き足した。

でも、それだけじゃない。

もっところ、直感に訴えられたのだ。

俺は新月に関わる大切な何かを見落としている。

（何だ、何だ、何だ——）

脳が必死にその何かを搜索している。

そして、見つけ出したみたいだ。

もともと俺の小説は、誰かに見せることを目的としていなかった。

そもそも俺は書き手ではなく、読み専だったのだ。

高校入学を機に買ってもらったスマホで、自分の好きなアニメやマンガの二次創作を見るのが好きだった。

特に妄想小説を好んで読んでいた。

自分にもキャラと同じ世界線で生きていたら、という妄想があった。

読んできた妄想小説を参考に、見様見真似みようまねで自分の妄想を文章にしていった。

それが、俺にとって最初の小説、作品だ。

このときはまだ、自分の妄想を記録しているにすぎなかったので、誰かに見せたいとは思わなかった。

自分の趣味として、自分ひとりで楽しめれば十分だった。

しかし慣れてくると、既読作品のキャラクターだけでなく、自分のオリジナルキャラクターも現れるようになった。

それも俺は記録として、文章にした。

すると不思議なことが起きた。

既読作品のキャラとの妄想をまとめた小説は、誰かに見せようと思わなかったのに、自分が一から考えたストーリーは、誰かに見せてもいいかもしれないと思えたのだ。

そこから俺は、オリジナル小説も書くようになった。

でも、公募に積極的に応募していたわけではない。

いつか気の許せる友人に見せようかくらいの気持ちで書いたものばかりだったからだ。

あの夜、デビュー作を思いつくまでは。

寒い日だったのに、急にアイスが食べなくなっただ。

部屋着の上からジャンパーを羽織はって、最寄りのコンビニまで歩いた。

耳にはイヤホンを突っ込んで、ラジオを聴いていた。

バナラアイスを買って終え、コンビニを出たときだ。

「俺なあ、ちっさいころ月が怖かったんだよ。特に今日みたいな新月の日」

「ほう、月？」

ラジオでは、今日のメッセージジテマである『小さい頃怖かったもの』の話になった。

パーソナリティーのコンビ芸人の一方が、自分のエピソードを話し出す。

「そう、月。月ってさあ、毎日姿が変わるやん？ 満月、三日月、新月って。それを見て、

小さい頃の俺は、月が生きてるって思ってたんだ。変身してるって思ってた」

「ヒーローもの見過ぎやろ」

「かもな。中でも一番恐ろしいのが新月やねん。俺は新月の日、月が消えたと思っただ。

だけど、いつの間にか三日月になって復活しとる。と思えばまた消える。とんでもない怪

物やと思ったね」

「ちっさいころからバカやったんやな、お前」

「うっさいねん。まあな、そんな月に住んどるっちゅう月うさぎって最強の生物やなどは思っとったけども。だから学校のうさぎにビビッてたけども！」

相方と話していた本人の笑い声が混じりあう。

ちよつと面白かった。俺も少し、口元が緩ゆるんでいた。

月の話題なんて、綺麗な満月か珍しい日食や月食だけだと思った。

新月で話を膨らませるとは、珍しさを感じた。さすが芸人。

何気なく、空を見上げた。見えない月を探して。

その瞬間だった。それは、降ってきたという表現にふさわしい。

頭にドーンやらピーンとやらきて、妄想がかつてないスピードで作り上げられていく。

脳内映像は極めて鮮明でクリア。

キャラたちの声まで聞こえてくるようだ。

こんなこと、今までになかった。

呆あっけ気を取られているうちにも、妄想の世界は進んでいる。何かが弾けたかのように、ど

んどん中身が溢れてくるように。

どうして急に、こんなところで、こんな手ごたえを感じるネタが思いついたのか分からない。

でも今は、そこじゃない。

これは、この妄想は、早くまとめないと。

忘れないうちに。ひとつも取りこぼさないように。

俺はダツシユで帰宅した。自宅まで脇目も振らず、全力疾走した。

すれ違った人は、俺が誰かに追われていると勘違いしたかもしれない。

けれどもそれは逆。

俺が新たに思いついた妄想の世界から、撒まかれないうち必死に追いかけていたのだ。

家に着くと、靴を揃えることはおろか、食べたかったはずのアイスも、そこらへんに放置した。

一直線に机に向かい、書き始めた。

日付が変わって太陽が昇ったことに目もくれず、凄まじい集中力が俺を味方した。手が足りない。タイピングが追いついていない。

俺が見ている脳内映像を、一瞬でそのまま形にできたらいいのに。もどかしい思いをしながらも、勢いのままぶっ続けて作業をした。

暖房のついた部屋で、アイスは溶けてドロドロになり原形をとどめていなかったが、書き終わるまで無視し続けた。

そうやって書き上げた作品は、言うまでもなく、自分史上最高の出来になった。

これを、気の許せる友人が現れるまで寝かしておくのはもったいなさすぎる。腐ってしまう。

その思いから、俺は公募に出した。

のちにデビューするとは知らずに。

まぶしい思い出。俺の人生のピーク。

一番小さい賞ではあったが、入選したと連絡がきたときは、もう本当に嬉しかった。賞の大ききなんてどうでもいい。

小説家になるという確かな意志はもっていなかったはずなのに、あたかもずっと前から目指していたかのような、それくらいの達成感があったのだ。

それは俺が、今まで大した夢を持たずにきたからだろうか。

はたまた、大した取り柄がなかったからだろうか。

口に何かが入ってきた。涙だ。

俺は泣いていた。

自分でも気づかぬうちに出ていた無意識なもので、なんで泣いているのかすぐに理解できなかった。

とりあえず、袖で涙をぬぐった。

けれど、また新しい涙が頬を伝う。次から次へと、静かに流れる。

拭く度、だんだんと霞が晴れていくみたいに、涙している理由が分かってきた。

俺は俺に泣いているのだ。こんな俺に。

いつからだだろう。

面白く書けなくなったのは。

書くことが楽しくなくなったのは。

いつだっただろう。

「ネタは良いですが、話が中途半端な気がしますね」

そう言った担当者に対して、どうして面白いと言ってくれないんだと、心の中で毒づいたのは。

どこに置いてきてしまったのだろう。

小説への情熱。謙虚さ。

変わらないでいたつもりだった。

変わらないでいてほしかった。

けれども俺は、忘れてしまった。変わってしまった。

こんなんでも俺は、今でも作家なのだろうか。

作家と言っても許されるのだろうか。

担当者が気にかけてくれていたから、自分は作家だとギリギリ自負じふできていたようなもの。

もし別の担当者だったら、俺はとうの昔に作家じゃなくなっていた。

俺を作家に留めていてくれていたのは、俺じゃない。担当者だ。

それだけじゃない。

俺は俺をも無視している。

ここ最近では、二作目のにの字すら、俺の中では薄くなっていた。

しかし、俺は読み専に戻ってはいない。

消えたように思われた心の炎は、かなり小さくか弱いが燃え続けていたのだ。

それは二作目を出すという思いだけを、燃料にはしていない。

本にならなくても、誰かに評価されなくてもかまわない。

もう一度、デビュー作を書いたあの夜みたいに、心ゆくまで、心のままに書きたい――

押し込め、見て見ぬふりをしていた思いの箱を開けたら、少し落ち着いた。

むくりと立ち上がり、窓を開ける。

いつも月が見える位置から、今日は見えない月を眺める。

夜の空気を肺いっぱいに取り込んで、ゆっくりと鼻から出す。

「月はいよいよなあ」

頬杖をつきながら呟いた。

太陽に勝手に照らされているから、自分で何もしくとも姿を変えて、それが人々に褒

められていて。

それで、いろんな作品の題材にもなって、人から好かれて。

月自体は、我関せずと言わんばかりに、毎日同じ動きしかりなくて、変わらなくて。いきなり来た地球人を受け入れる、心の広さまで持ち合わせて。

「月がうらやましいよ」

(でも俺は、月じゃないからさ)

今の姿もすべて、誰かに作りだされたわけじゃない。

変わらないことを願いながら、強烈に変わりたいと思っている。

デビュー作を思いついたあの日と、今同じ気持ちになっているみたいだ。

新月は、俺にとって特別なものかな。

いや、今日が新月だと気づいた日が、俺にとって特別なのだろう。

(そうか。俺はこれから満ちていくのか)

なんだかまだ、俺はできる気がする。

パソコンを起動し、キーボードの上で指を躍らす。

カチカチツという速いリズムと音。

それしか聞こえなくなっている、この集中力。

そして湧き出る創作意欲。

久しぶりの感覚。

今日はまだ続く。終わらない。

だって今夜は、新月なのだから。

マイペースハート

石志波 音

2022年2月13日 初版発行

発行：名古屋デザイン&テクノロジー専門学校

印刷・製本：(株)オンデマンド

無断転載・転記禁止